



上智大学大学院  
文学研究科ドイツ文学専攻

# 大学院 修了生 20人の今



## 教員・研究分野

小松原 由理

● ドイツ語圏アヴァンギャルド芸術・文学

三輪 玲子

● ドイツ現代演劇

中井 真之

● ゲーテ、ヤコービ、ドイツ古典主義の文学・  
芸術思想

ツェムザウアー・クリスティアーン

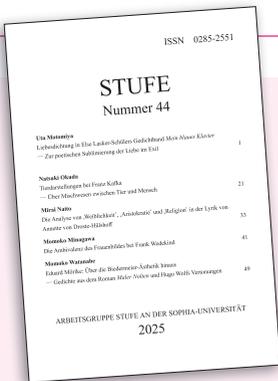
● 現代ドイツ文学と20世紀のオーストリア文学

大田 浩司

● ドイツ叙情詩、近代ドイツ美学・詩学

高橋 優

● ドイツ・ロマン主義の文学と思想



## 研究活動

文学研究科ドイツ文学専攻では研究業績を大学院 stufe 刊行委員会が発行する機関誌『STUFE』に前期課程院生は1回、後期課程院生は2回以上発表することを推奨しています。stufe 刊行委員会は院生で構成されています。



1 私は最初は主にドイツ語の大学テキストなどを出版している会社に就職しましたが、今は高校教科書、辞典、一般書などを出版している会社に勤め、英語関連書籍の編集の仕事をしています。私の周りには私と同じように修士課程を修了した人が多く働いています。

出版社で編集の仕事をした場合、当たり前ですが、まずその出版社がどのような出版物を出しているかを調べる必要があります。そして、その会社でどのような本を作りたいか(誰に、どのようなことを書いてもらいたいかなど)を考えておく必要があります。

どのような本を作りたいかを考えるとき、実際に編集の仕事をしたことがないのに…、や、こんな夢みたいな話をして笑われるのでは…などと遠慮する必要はありません。修士課程まで進まれたからには本との付き合いはより濃いものになっていると思います。これまで読んできた本の中から記憶に残っているものを、どうしてその本がよかったのか、どこに感心したのかを見直してみるとよいと思います。そこで見つけた観点を他の題材や他の分野などにアレンジしてみることから始めてみてはいかがでしょうか。(2002年 修士課程修了)

2 私は研究者向きではありませんでしたが、大学院という場所で、色々な人に囲まれて、自分と向き合ったことは私の人生の質を少し変えました。物事に自分がどういう感想を持ったのか、自分なりの言葉にできるようになっているように思います。それは自分自身を見つめることでもあるようです。今図書館で働きながら、この人は何を求めているのかなと考えるとき、大学院生活で培ったものがいくらか活かしているように感じます。(2015年 修士課程修了)

3 大学院の魅力は、やはり1つのことをじっくり考えられ、そして少人数で密に色々な考えを分かち合えるということじゃないでしょうか。現在菓子メーカーの企画部に勤務していますが、当時培った1つのことをとことん研究してそれをアウトプットするという力は、お客様が求めるものが何かを推察して、商品を企画して形にしていく上でとても役立っていると思います。(2015年 修士課程修了)

4 私は現在、メーカーで貿易業務をしています。海外とのやりとりは英語ですが、英語以外の言語を学んだことは間接的に役立っていると体感しています。大学院では、文献を読み、ゼミで議論を交わす日々でした。熱意ある先生方や院生と色々な話をできたことは大変有益な経験でした。(2016年 修士課程修了)

5 私は現在、輸送用機械製造・不動産開発を行う会社の秘書室に勤務しています。ドイツ語に直接触れる機会は残念ながらあまりありませんが、それでも大学院での経験が、今の私を形作ってくれていると実感しています。大学院時代の文献研究で培った、何事にもなぜ?と自発的に疑問を持つこと。そして、他の見方も出来ないかどうか自分自身で調べ、深く考えるという習慣は、現在の日々の業務においても活かしています。

大学院での濃密な知的探求の時間は、その後社会人生活を送る上でも、豊かな糧となってくれるはずです。  
(2016年 修士課程修了)

6 ドイツ・フランスの磁器やクリスタルブランドの日本総代理店で、主に翻訳・通訳業務に携わっています。就職活動ではドイツとは無関係の様々な業界の面接も受けました。就活において「大学院で学んでいる」ということは、就職を難しくすると思われがちですが、面接などで自分の経験値は他の大学生とは違うことを感じ、若い学生を採用したい企業ではなく、能力を評価してくれる企業を探しアプローチしました。「大学院で学んでいる」ことの強みを再認識し、マニュアル通りの就活から一歩踏み出し、今の会社に新卒で採用していただきました。大学院生が大学生と同じ土俵に立っても、目を向けてくれる企業は少ないかもしれません。しかしドイツ語の文献を様々な角度から解釈するのと同じように、広い視野を持ってアプローチすることで、道を拓くことができると思います。幸いなことに、私は大学院での勉学を直接仕事に活かすことができています。ドイツ文学を通して得た文化的知識は、商品説明文の作成や接客の際に、大学院で培った読解力は、本国ブランドのカタログなどの和訳作業につながっています。またドイツの職人が来日して、百貨店で実演を行う際は帯同して、通訳業務だけでなく、食事や観光などのお世話もしますが、彼らとコミュニケーションをとるのに、大学院時代の先生方や仲間との何気ない会話の内容を話のネタにしたりしています。どの業務も大学院に通っていないなかったらこなせないものだと思っています。そしてドイツ語に限らず、物事を多角的に見る目、臨機応変な対応、自分の意見はしっかり持ちつつも、相手の意見を柔軟に取り入れる姿勢など、社会人として身に付けなければならないことを、社会に出る前の大学院生の間で、先生方や仲間との密な関係の中で学ぶことができたのは、私にとって大きな財産になりました。

(2016年 修士課程修了)

7 現在、病院の本部で事務職員として働いています。大学院では、学部より専門的な分野を学ぶことができます。自分の知らない作品に触れることで、自分の興味を広げて、修士論文を書くときにも役立ることができました。大学院の2年間は、自分の考え方や価値観を形成する期間となり、ドイツ文学という枠を超えた知識や教養を身につけることができました。これは社会人になっても役立っています。

(2017年 修士課程修了)

8

私は現在、スイス人の弁護士事務所の秘書として働いています。大学院へ進学する決意をしたのは3年次の終わり頃です。上智大学ドイツ文学科での最初の二年は、第一にドイツ語を覚えること、そして第二に「ドイツ文学」の広大な歴史とジャンルを把握することにかかりきりになる人が大半かと思います。しかし3年生になると、新たに文献演習や文学研究などの授業が加わり、自分がどの時代のどの分野、更には言えばどの特定の作家に心が惹かれるかがわかってくると思います。？私自身は世紀末ウィーンという区分に興味を持ち始め、卒業論文に向けて資料や文献を集めて読んでいきました。そしてその過程でどんどん知ることにのめり込んで行くうちに、まだまだ自分のドイツ語が未熟であることを痛感しました。将来語学を要する仕事に就きたかったこともあり、ならば大学院に進学し、文学研究を通してドイツ語を学ぶのが最適ではないのだろうかという結論を出しました。

大学院での授業は学部の授業と比べて重厚で、しっかりとした予習と発言を求められます。とは言っても、その分一日の授業数は多くても2コマ程度であり、少人数で行われることから、先生方からよりの確にドイツ語と研究指導をして頂けます。また先輩方からも同様に沢山の助言を受け、時には意見を交わし、文章の構成や考えのまとめ方等の様々な点においても成長することができました。笑いときどきと感服が絶えない日々だったと振り返ってしみじみと思います。

私は最初に述べたように、現在は弁護士事務所の秘書として働いています。大手新卒採用サイトを介した就職活動以外にも、多言語を必要とする一般求人にも直接問い合わせ履歴書を送り、最終的にその枠で頂いた内定を受けました。まだまだ秘書としては見習いという立場ですが、主に任されている翻訳を始め、校正、代書、書類作成などの業務は大学院で学んでいなければ身につけていなかったものだと思います。私のように、学部生時代に留学するタイミングを逃した方、更にドイツ語を学びたい方、そして言うまでもなくドイツ文学の研究がもっとしたい方には、大学院進学を強くお勧めしたいです。  
(2017年 修士課程修了)

9

私は現在、コンサートや舞台などのイベント、博物館や美術館の展示などの企画運営に関わる仕事をしています。ドイツ文学とはあまり関わりがないように思われるかもしれませんが、実際は私が大学院生の間に学んだことの多くが仕事で活かされています。

大学院では文学はもちろん、演劇や映画、音楽や絵画など、なんでも自分の好きなことを学べる環境があります。特に私が興味を持っていたのは踊りや演劇、芸能についてで、上智の文学研究科ではそれらも研究テーマにし自由に学ぶことができました。学部生時代の私は成績が良くなく、3年生になり就職活動を意識し始めた頃、「自分は学部で何を学んだのか。やっと少しドイツ文学が分かるようになったのに、このまま卒業し就職したら、就職活動のために大学に通ったようなもので虚しい。もっと学んで、ドイツ文学科を卒業したのだと堂々と言えるようになりたい」と思ったのが大学院進学のきっかけでした。

多くの人が学部を卒業後すぐに社会人になるため、大学院に進学したら遅れをとるのでは心配する人もいますが、私はむしろ大学院の3年間に興味のあることを思う存分学んだことが就職に強く結びつきました。修士課程の3年間、何にも邪魔をされずに自由に学べた贅沢な時間は人生の宝です。

(2019年 修士課程修了)

10 私は修士課程修了後、ウェブマーケティングの仕事をしています。フルタイムで働きながらドイツ詩の研究も細々と続けており、修士修了後も論文を書いております。これは全て、ドイツ文学科の教授の皆さま、そこで出会った先生方のご指導があってこそ出来たことでした。仕事を無理にドイツ文学に結びつけることはせず、楽しみながら研究を続けられることに感謝しています。大学院は、人生で一番好きなことに取り組むという豊かな日々でした。(2024年 修士課程修了)

11 私は修了後に国家公務員採用総合職試験を受験し、省庁から内定をいただきました。来年度から国家公務員として働きます。大学院では、ドイツ文学の世界に浸り自分の興味関心に率直に向き合うことで「自分の心が何によって動くのか」を深く理解できると思います。ドイツ語の能力などの実践的な力のみならず、人生を支えてくれる内的な力を養えるはずで、大学院で得たかけがえのない知見にこれからも勇気づけられると私は確信しています。(2024年 修士課程修了)

12 現在は、国際文化交流機関で「外国語としてのドイツ語(DaF)」の分野における専門知識を学びながら、ドイツ語教育にも携わっています。大学院の頃と変わらず、今も研究と思考錯誤の繰り返しですが、非常に充実した日々を送っています。今こうして大好きなドイツと関わりを持ちながら生きていけているのも、大学院で学びを深める中で、自分自身を見つめ直すことができたからだと思います。大学院に進もうと考えているあなたは、きっと多数派ではないでしょう。就職に向けて準備を進めている友人を目にすると、焦燥感に駆られる気持ちも痛いほどわかります。しかし、研究に心ゆくまで浸ることのできる2年間は、何ものにも代えがたい濃密で貴重な時間です。新たな一歩を踏み出そうとしているあなたに、大学院での研究テーマであるヘルマン・ヘッセの言葉を贈ります——「どんな始まりにも、魔法が宿っていて、それが私たちを守り、生きる助けとなってくれる」(2025年 修士課程修了)

13 大学院在学中に就職活動を行い、一般企業から内定をいただきました。研究に取り組みながら就職活動を進める中で、専門的に学んだ経験が自身の視野を広げ、将来を考える上で大きな支えになったと感じています。修了後は内定先の了承を得て、約10か月間ドイツに滞在しました。語学学習に加え、ヨーロッパ各地を旅し、多様な文化や価値観に触れられた時間は、本当に楽しく、非常に充実した貴重な経験でした。4月から新たな環境で社会人生活をスタートします。(2025年 修士課程修了)

14 現在、私は「フェムテック」と呼ばれる、女性特有の健康課題をテクノロジーで解決する分野に携わっています。女性の人生を支えたい——この道を選んだ理由は、学部・修士課程を通して出会った、「女性」という枠組みから外れ、多様な生き方を選ぼうとした世紀末から1920年代にかけてのドイツの女性たちとの出会いにあります。「女性はこうでなければいけない」「女の子なんだから」そうした言葉への違和感を押し殺していた頃。そんな時に授業で出会った、その時代の「新しい女性たち」は「性」に囚われることなく激動の時代を生き、自分の人生を謳歌していました。その姿は、性規範が根強く残る日本に生きる、かつての私と同じように違和感を抱く女性たちを、「女性」という枠組みから少しでも自由にしたいという、今の私の思いへとつながっています。(2025年 修士課程修了)

15 地方の国立大学に勤務しています。所属する学部には人文科学系の教員だけではなく、社会科学系や理系の教員もいて、私はドイツ語やドイツ文学のほか、地域連携の授業なども担当しています。上智の大学院では、先生方に手厚い指導を受けました。通常の授業はもちろんのこと、ゼミとしてのリーディングコース、読書会、講演会、はたまた軽井沢や秦野での合宿にも参加する機会に恵まれ、活動の場が広がりました。また、図書館の蔵書のなかに引きこもった日々や、同年代の院生たちと研究室や学食、そしてしみち通りの店でさまざまなことを語った日々を懐しく思い出します。これらの経験は、今を生きる糧になっていると思います。

(2002年 博士課程修了)

16 神奈川県私立大学でドイツ語を教えている「教授」というキャラのなかの人です。思いついて学部4年のときに一年間ケルンに留学し、帰ってきてからもドイツ語圏の文学・映画をさらに観たい、読みたい、考えたい、と思ったのが修士課程に進んだ理由です。修士課程1年目はほんとうに楽しかった。推理小説も書いているスイスの作家を研究対象と決めてから、夏休みには戯曲、小説、エッセイが詰まった同作家の全集をずっと読んでました…。小説やマンガを読み、劇や映画を観て考えるというのが自分の仕事なんだから、好きなことをしても誰にも文句言われないんですよ！(修論追い込みの2年目に涙し、さらにその後の2度の留学で現実の波に揉まれ、帰国してから博士論文の完成までに数年が経過、と同時に、長い非常勤生活が待っていることを当時の私は知らないが…。まあ、がんばってどうにかしなさい、当時の私よ。)

(2003年 博士課程修了)

17 地方大学でドイツ語を教えています。平日は毎朝8時には職場へ行き、20時ごろに帰宅しています。通勤は車で片道10分ほどです。特別なことは何もありません。ここ数年は校務が少し増え、出勤は早まり帰宅も遅くなりました。大学で自分の作業ができる時間もぐっと減りましたが、時期的なものを受け入れています。諦念。寝る前に愛用の無印木軸シャーペンでぐりぐりとメモを取りつつ読書をするのが日課です。よく寝落ちしています。妻の出勤が早いので、私も早起きです。朝食前の時間を書きものに!と努めてみるも、うまくいきません。つい気ままなドイツ語の読書に流れてしまいます。朝方目にするドイツ語は耳おくにも残るような気がして心地よいです。

(2008年 博士課程修了)

18 東京の私立大学でドイツ語やドイツ文化について教えています。そんな私ですが、学部時代は上智大学所属でもなければドイツ文学科所属でもありませんでした。ドイツ留学を通じてドイツ文学に関心を持ち、説明会を通じて魅力を感じた上智大学のドイツ文学専攻の門を叩きました。当然、同期の仲間たちに比べて知識や経験には大差がついており、不安を覚えることもありました。しかしドイツ文学専攻の先生方はそんな私に対しても手厚く指導をしてくださり、先輩がたや仲間たちも、私の奮闘劇を温かく見守ってくれました。

## \*博士課程修了生

現在大学で教えていると、自分の「わからない」に真剣に向き合ってくれてありがとう、と声をかけられることがあります。しかし、それは私自身の心というより、院生時代に支えてくださった先生方や仲間たちの温かく寛容な精神に従っているところがあります。大学院で学んだ経験が、大学教員としての私のルーツとなっているのです。

上智大学のドイツ文学専攻は温かくオープンな世界です。説明会に参加をして、その時あなたが「ここが自分の居場所かもしれない」と思えたのなら、ぜひチャレンジをしてみてください。誠実さと熱意があれば、きっとあなたも素敵な恩師と仲間を見つけることができるはずです。

(2017年 博士課程修了)

19

現在は京都の私立大学でドイツ語を教えています。先生方から教えていただいたこと、先輩からのアドバイス、同級生や後輩との何気ない会話など、上智の大学院での日々はかけがえのない財産です。大学院への進学を決めたのは、学部4年生の春でした。修士課程では教職課程も並行して履修していたので忙しく、レポートの執筆や模擬授業の準備に追われていました。ですが、この頃の経験が今の教育活動に大いに役立っています。博士課程では、自分の研究に専念し、論文執筆や口頭発表に力を注ぎました。先生に何度も添削していただき、テキストを前に頭を悩ませたことが、研究者としての礎になっています。

(2021年 博士課程修了)

20

小学五年生のころ、先生からふいに「ねえ、鏡って何色だと思う？」と問いかけて絶句した。この問いは、答えを出すのではなく、思考することそのものが目的となっていると感じ、即座に反応できなかった。今にして思えば、その時感じた困惑まじりの興奮が私を大学院へと進ませた。院生時代の私は「鏡の色は何色か」のようなわりきれない問いに迷い込み、夢中になって考えを巡らしていた。私にとって大学院は、そのような野蛮な行為が許される場所だった。テキストを丹念に読み、アイデアを練り、口頭発表や論文へとまとめ上げる日々。それはまるで鏡の色を果てしなく問いつづけるような毎日で、不安もあったが、それ以上に新鮮で、刺激的だった。大学院でしか味わえない「新鮮で苦しみおおい日々」。ぜひ渦中に飛び込んでほしい。もしあと戻りができなくなったら、そのときは深く研究者（同業者）になりましょう。

(2023年 博士課程修了)

ドイツ文学専攻入試説明会は毎年、6月・11月に行なわれます。  
教員及び、現役院生が直接質問等にこたえます。

◎お問い合わせは

上智大学ドイツ文学科（ドイツ文学科事務室）

TEL : 03-3238-3680 FAX : 03-3238-4147

E-mail : dgerlit@sophia.ac.jp

JR 中央線・総武線／東京メトロ丸ノ内線・南北線

「四ツ谷」駅下車 徒歩3分